

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720234

研究課題名(和文)バイリンガル教育の要因 外国人児童の家庭における取りくみを中心に

研究課題名(英文)Factors in bilingual education for foreign children

研究代表者

呉 禧受(Oh, Heesu)

名古屋大学・国際言語文化研究科・研究員

研究者番号：70594406

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、外国人児童とその親は母語保持についてどのような意見を持っており、外国人児童の家庭における言語生活はいかなるものかについて探ったものである。

韓国人同時バイリンガル児童の言語使用を縦断的に観察した結果、児童らは状況や目的によって言語シフトを頻繁に変えており、それはコミュニケーション・ストラテジーともなるものであった。また、母親の発話の影響で日本語から韓国語へと言語シフトを変える場面が観察されており、バイリンガル教育において家庭における日常会話がいかに重要であるかが示唆された。韓国人と日本人母親へのインタビューからは、バイリンガル教育への期待と意欲それから迷いを窺うことができた。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the attitudes of foreign children and their parents toward home language retention, as well as how they use their languages in daily life.

To explore bilingual children's language use, 3 Korean simultaneous bilingual children's conversations with their family were longitudinally observed. It was found that they shifted language very frequently depending on the circumstances and purposes of communication. Code switching, then, is a common communication strategy for them. In addition, the children shifted from Japanese to Korean under the influence of their mother's discourse without overt pressure from the mother to do so. It shows the importance of using the home language of the parents in bilingual education. The interviews with Korean and Japanese parents revealed that they recognize bilingual education and the home language as important, yet remain very uncertain as to how to raise their children bilingually.

研究分野：バイリンガル教育

キーワード：バイリンガル 外国人児童 家庭内言語 言語選択 コードスイッチング 親子間の会話 メタ認知

1. 研究開始当初の背景

(1) 複数の言語と文化を背景に生活している児童らにとって、家族間で話されている**母語、または家庭内言語 (home language)**の保持は、「親とのコミュニケーション」、「情緒的な安定」、「アイデンティティーの確立」、「認知的発達への影響」、「帰国後の再適応」のために重要であり(山本 2000、Baker 1996、Commins 1985)、バイリンガル教育の土台をなす。

(2) しかし、実際にバイリンガルな環境で子どもを育てている親の間では、「バイリンガルは学習成績が伸びない」、「子どもが混同する」、「日本語以外の言語を使うことは日本語の上達を妨げる」、「社会で話されている日本語が上手になってから家庭内言語を学べばいい」などと、様々な憂慮や憶測がある。

(3) バイリンガル研究の多くは「母語教育の重要性」を土台にして行われているが、その研究成果が一般の生活場面に浸透することは少ないようである。また、バイリンガル教育や外国人児童の言語能力の研究は主に教室や学校場面を対象としており、実際に子どもの母語能力の獲得、育成、保持が行われる最も基礎的な場である家庭でのバイリンガル教育に関しては数少ない実態調査に留まっている。

(4) 成長の段階にいる子どもたちの言語使用をどのように評価し、どのような支援をするかは現代社会が抱えている重要な課題である。日常的に複数の言語に接している子どもがどのような言語の使い方をしているか、また彼らを育てている親はどのような考えと信念で言語教育を行っているかを把握し、理解するのはその支援への第一歩となると考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、これまでのバイリンガル研究の成果が外国人児童を抱える一般家庭にまで浸透することがあまりなかったこと、外国人児童の家庭を対象にした言語教育に関する研究が少ない現状を踏まえ、バイリンガル児童は実際にどのように言語を使用しているか、外国人児童とその親はバイリンガル教育に対しどのようなビリーフ (Beliefs) を抱いているかを検証する。

本研究の結果によって、外国人児童の言語生活と外国人児童とその親のビリーフとの関係、家庭における言語教育とビリーフとの関係及び、ビリーフが言語能力の獲得と維持にどのような影響を与えるかが明らかにできると期待できる。

本研究はこれまで一般の生活場面に浸透していなかったバイリンガル研究を当事者

である外国人児童とその親を中心に考えるための新しい試みである。さらに、ケーススタディーを通して、日本におけるバイリンガルの実態を明らかにし、バイリンガル教育の具体的な方法について考える。

(1) **バイリンガル児童の言語使用の実態**を明らかにする。バイリンガル児童は日常生活においてどのように言語を選択し使用しており、その背景となるビリーフ (Beliefs) とメタ認知はどのようなものかについて検証する。

(2) 外国人児童を育てる**親のバイリンガル教育に対するビリーフ** (Beliefs: 意識的、または無意識的に抱く言語習得に対する考えや信念) を明らかにし、外国人親の支援策構築に活かす。

3. 研究の方法

(1) バイリンガル教育に影響を与える要因を知るため、日本の小学校に通う同じ学年の韓国人日本語同時バイリンガル児童二人の韓国語能力を検証し、さらに母親らへのアンケートとインタビュー調査を行った。母語である韓国語能力と韓国語に対する児童らの態度及び日常生活における親の母語保持努力について分析を行った。

(2) バイリンガル児童の言語使用の現状を知るため、韓国人同時バイリンガル児童3人の日常生活における会話データを縦断的に収集し、場面による言語選択に注目し、分析を行った。収集期間は、児童二人に関しては、2011年からの5年間で、児童一人は2014年からの2年間である。

(3) バイリンガル児童を育てる親のビリーフ (Beliefs) を知るため、日本における韓国人母親を対象にインタビュー調査を行った。また、2013年研究のため1年3か月間滞在したニューヨークで、アメリカ在住の韓国人と日本人母親を対象にインタビュー調査を行った。インタビューの内容は、日本またはアメリカでの子育てで、言語や言語教育の面で不安はあるか、もしあるならどのようなものか、日常的に家庭内言語 (または母語) を保持するため心懸けていることはあるか、バイリンガルに育てたいと思うならその理由は何か、などについてである。インタビューは個人、またはグループで、30分 (個人) から1時間半 (グループ) にかけて行った。

4. 研究成果

(1) **家庭におけるバイリンガル教育に影響を与える要因について:**

研究対象の韓国人男児二人 (P、Y) は同学年

で、日本で生まれ、よく似た家庭環境で成長している。アンケートの結果から、家庭における韓国語の使用量など、母語保持努力でもさほど大きい違いは見られなかった。

しかし、『バイリンガル会話テスト (Oral Proficiency Test for Bilingual Children)』で会話力を測った結果は大きい差を見せていた。

P は、助詞の誤用が目立ち、発音が不分明であり、韓国語で最後までタスクが移行できず、途中で日本語に切り替えていた。また、韓国語の質問にはなるべく短く返事をするなど、韓国語の使用にあまり自信がないような態度であった。

Y は韓国語の発話量が多く、タスクの最後まで韓国語で話していた。Y が使う韓国語は文法的に安定しており、助詞の使い方も的確であった。Y が保有している韓国語語彙、慣用句の数は不足するが、回避せず積極的に物語を作ってタスクをこなしていた。よくわからない単語はすでに知っている韓国語で言葉を作って筆者を理解させているなど、所謂流暢である印象を与えていた。

母語維持の難しさについて山本(1991)は、家庭内で少数派言語使用の環境にあっても現実的に必ずしも維持できるとは言えないとした。また、斎藤(1997)は、家庭内で中国語を使用しているにも関わらず、母語を喪失している中国帰国者のケースから、家庭内で漠然と母語を使用するだけで保持されるのは難しいとしている。

母親へのインタビューによると、P と Y 二人とも韓国や韓国にいる親戚のことが好きであるとのことであるが、日常的に韓国語を使うことに対しては、異なる態度を有していた。P は相手が親、兄弟であっても周りに日本人がいると日本語で話すが、Y の場合、周りに誰がいることより、会話の相手が家族であれば韓国語で会話を行うことは当然のようであった。Y は周りの状況に関わらず韓国語を使い続けているうちに韓国語実力が上昇したのではないかとと思われる。

Landry & Allard(1992)はバイリンガルの育成に影響を及ぼす要因を社会的レベル、社会心理的レベル、心理的レベル、言語使用という4つの要因から説明している。社会的レベルとは母語と現地語の力関係のことで、その言語を話す人がどのくらいいるか、その言語を話す集団は政治的、経済的、文化的にどのくらい優越か、などが関わってくる。社会心理的レベルとは、母語への接触機会がどのくらいあるか、家庭、学校、社会においてどのくらい話されているか、その言語への教育的な支援はあるかによって規定される要因である。心理的レベルは子どもの適性、年齢、能力、社会的レベルに対する態度などを含むが、中島(1998)は、子どもがその言葉を使うかどうかは「心理的レベル」で決まるとし、母語を使い続けることでその言葉への接触量を増し、心理的に影響し、言語集団のバイ

タリティ (Ethnolinguistic Vitality : 言語集団の大きさや影響力) を強化するとしている。P が周りに日本人がいるときは韓国語を使いたがらないのは、心理的レベルの影響があると思われる。

P と Y のケースから、母語接触量を増やすだけではなく、外国人児童の心理的要因に配慮し、メタ認知的な「母語使用の意志」を育ててあげることが重要ではないかと思われる。

本研究は1回の論文投稿と3回の学会発表を通して公表している。

(2) バイリンガル児童の言語使用と選択及び親子間のディスコースについて :

3人の韓国人日本語同時バイリンガル児童の日常会話を長期的に記録し、主に言語使用と言語シフトの変換について、社会言語学的に分析を行った。

バイリンガルの普遍的な特徴として、一つの会話で二つ以上の言語を交互に使うコードスイッチング現象 (code-switching) があげられる。今回の研究対象となった3人のバイリンガル児童も日本語と韓国語の両方が理解できる家族との会話ではコードスイッチングを頻繁に使っていたが、それは単なる言語混合ではなく、要求、補足、強調、冗談などのコミュニケーションストラテジーとして使われていた。研究対象の児童らにとってコードスイッチングは、言語表現をさらに豊かにするものであった。また児童らのコードスイッチングは瞬時で潜在的でありながら、目的を持って行っていることが会話データで示唆された。

児童らの家庭は韓国語を基本としているが、言語使用のルールは設けておらず、日本語も自由に使うことができる環境であった。児童らはともに日本語を得意とするが、彼らにとって韓国語は「母から話してもらいたい言葉」、「自分から発しなればいけない言葉」という位置づけがされていることが会話データからわかった。それは児童らの両親が日常的に韓国語を話していることに影響されたことであると思われる。

バイリンガル児童のコードスイッチングの評価において、「言葉を混ぜる」という行為に注目するより、日本語で話せば言葉を「混ぜずに」話せるのを、日本語を混ぜても家庭内言語の韓国語で話そうとする彼らのメタ言語意識を評価してあげることが重要であると考えられる。

また児童らと児童らの母親との会話を記録し、親の韓国語の発話がインプットとして児童に影響を与えているかを観察した。殆どの会話で、母親らは韓国語で話しており、児童らは日本語で話している。しかし、児童らは直前に発せられた母親の言葉(韓国語)の影響でしばしば自ら使っていた日本語を韓国語に切り替えており、バイリンガル児童が

柔軟にコードスイッチングしているのは、母語(または家庭内言語)習得の可能性をさらに高めるものであった。また、親が日常的に家庭内言語を使うことは、外国人児童の家庭内言語の産出能力の発達を促進させるものであることを示唆していた。

本研究は、1回の論文投稿と7回の学会発表で公表している。

(3) バイリンガル児童を育てる親のピリフについて:

日本やアメリカでバイリンガル児を育てる韓国人と日本人母親 28 人を対象にバイリンガル教育に対するピリフ(beliefs)についてインタビュー調査を行った。全体的な傾向としては、母親らはバイリンガル教育に高い関心と意欲を有しているが、バイリンガル教育への経験と知識がないことで、どのように教育すればいいかという苦悩と迷いがあった。母親らが抱くバイリンガル教育への意志は時には児童への家庭内言語の学習や使用の強要という形で現れ、母親と児童の心理的負担となり得る可能性も見られた。児童がコミュニケーションストラテジーとして行うコードスイッチングを単なる言語混合と見なし家庭において韓国語のみの使用を促している意見もあったが、それは児童のコミュニケーション意欲と目的を脅かすものであり得ると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

呉 禧受、バイリンガル教育の要因 母語能力が異なる二人のバイリンガル児童を対象に、日本言語文化研究、査読有、第2輯、2012、177 - 185、中日韓朝言語文化比較研究会

呉 禧受、バイリンガル児童の言語選択の特徴 韓国人同時バイリンガル幼児と児童の発話データから、日韓学術交流会：言語文化を巡って：国際シンポジウム記念論文集、査読有、2015、日韓学術交流会

[学会発表](計 9 件)

呉 禧受、バイリンガル児童の日本語能力 韓国人バイリンガル児童のケース、第9回世界日本語教育研究大会、中国天津、天津外国語大学、査読有、2011年8月21日

呉 禧受、バイリンガル教育の要因 母語能力が異なる二人のバイリンガル児童を対象に、第2回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム、中国延吉、延辺大学、査読有、2011年8月23日

OH, H、Maintaining Bilingual

Education' Bilingual Summer School, Bangor University, Bangor UK, 査読有、2012年7月20日

呉 禧受、同時バイリンガル児童の言語選択の特徴 多言語環境に置かれている子どもの言語能力をどう評価するか、韓国日本語教育学会第55回国際学術発表大会、韓国光州、全南大学校、査読有、2012年9月22日

OH, H、Why do they code-switch and how?, International Conference on Multilingualism, McGill University, Montreal Canada, 査読有、2013年10月25日

呉 禧受、コードスイッチングから見られる言語シフトの特徴 同時バイリンガル児童の発話データから、第11回世界日本語教育研究大会、オーストラリア・シドニー、UTS、査読有、2014年7月12日

呉 禧受、バイリンガル児童の言語選択の特徴、第2回日韓学術交流会、名古屋大学、査読有、2014年8月24日

OH, H、Respecting international children's rights to language choice; The role of parental input and interaction of Korean/Japanese simultaneous bilingual children,

International Conference on Bilingualism, Malta University, Malta, 査読有、2015年3月25日

呉 禧受、家庭内言語のインプットについて考える - 韓国人同時バイリンガル児童の親子間の会話を中心に、第4回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム、中国延吉 延辺大学、査読有、2015年8月19日

呉 禧受、バイリンガル児童の言語選択の意思を尊重した家庭内言語の習得、第12回第1言語としてのバイリンガリズム研究会 (BiL1)、立教大学、査読有、2015年10月17日

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

呉 禧受 (Oh, Heesu)
名古屋大学・国際言語文化研究科・研究員
研究者番号：70594406

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：